メイン・ディッシュ 2

石田衣良

昭和五十九年五月二十五日初版発行

著　者　片岡義男（かたおかよしお）
発行者　角川春樹

メイン・テーマ PART 2

カドカワ ノベルズ

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社多摩文庫
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三―三八一八五二一　編集〇三―三八一八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-774403-0946(0)

メイン・ディッシュ2

斤田雅男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

KADOKAWA NOVELS

メイン・テーマ PART2

片岡義男

本文イラスト／池田和弘

27

朝刊の第一面、左下にのった天気図によると、気圧の配置は夏にちかい。列島の東方海上に、一〇二二そして一〇二三と数字の出ている大きな高気圧があり、この高気圧の影響下にある列島は、北日本をのぞいて全国的に快晴だ。真夏のような暑い日が三日前からつづいていて、五月なかばの日曜日である今日も、朝から夏の日だ。

これからさらに一週間は、低気圧は主として北日本方面を通過するみこみだ。このため北日本では天気は周期的に変化し、北海道では曇りや雨のところもあるだろう。そのほかのところでは、暑い快晴の日がつづくはずだ。

一週間前には、台風4号が、天気図のなかに登場した。台風3号が発生してから五〇日ぶりの新しい台風だった。梅雨前線の活動は、まだ弱い。

気象衛星の雲写真によると、朝鮮半島北部、北海道付近、中国大陸、そして日本の南海上に白くかげっている雲域のなかに、ところによっては雲頂高度が一五キロ以上に達する非常に発達した積乱雲がある。大気の成層の不安定な地域で発生する雲だ。

列島の東方海上にある大きな高気圧の影響による真夏のような晴天の日は、さらに一週間ちかくはつづくだろう。そのあと、北海道東部や日本海北部、そして朝鮮半島北部にかけての雲が、ゆっくり南へ降りてくるだろう。東シナ海から華中にかけても、雲がある。東シナ海方面には低気圧があらわれ、九

州から大陸東部にかけて積乱雲の雲域が広がり、その雲の下では、雷をともなった強い雨が降るだろう。そして、一〇日以上も暑い晴天の日がつづいた列島は、久しぶりに雨模様となるはずだ。そのころ、新聞の天気図は、梅雨型の気圧配置になっている。

洗濯物を入れたかごを両腕でかかえて、三枝恵美子は、ユーティリティ・ルームから外の廊下へ出て来た。洗濯物は、かごにいっぱいにつまっているが、遠心脱水機が水をしぼりとったあとなので、拍子抜けするほどに軽かった。すすぎとか排水とか、あるいは強い反転とか、ダイアルでセットした指示にしたがって忠実に働く洗濯機が、ついさっきすべて洗いあげたものだ。

廊下をまっすぐに歩いて居間に入り、その居間を横切り、バルコニーにむかって恵美子は歩いた。そして、バルコニーに出た。

乾いたさわやかな風が、彼女の全身を撫でるように吹いた。薄くて軽い生地の、はき心地の良いみじかめのスカートに、おなじく軽くて薄い半袖のシャツを、いまの恵美子は着ていた。風は外側から彼女の体を撫でると同時に、スカートやシャツの下に巧みに入りこみ、全身の肌を撫でた。

バルコニー用のサボをはいて、恵美子は、人工芝の敷きつめてあるバルコニーに出た。広いバルコニーぜんたいに、強く陽が当たっていた。脚や腕、そして顔に、楽しい気持で彼女はその陽射しを受けとめた。朝早くから夕方まで、このバルコニーには陽が当たりつづける。

かごを足もとに降ろした恵美子は、脱水した洗濯物をひとつずつ指さきにつまんで広げ、ていねいにしわをのばし、物干しのピンにとめ、ぶらさげていった。二五歳の、ひとり暮らしの女性の洗濯物だが、ひとつひとつに、みじかいストーリーがこもっている。

彼女がひとりで住んでいるこの3LDKの部屋は、五階建ての建物の四階にある。丘の中腹に、複雑なかたちで建っている五階建てだ。

洗濯物をいくつも吊り下げることのできる物干しに、かごのなかの洗濯物を、恵美子は、ひとつだけ残してすべて、吊り下げ終った。こうして洗濯物を明るい陽射しのなかに干すと、ささやかに幸せな達成感があった。

物干しの位置をなおし、彼女は青い空を見あげた。この強い陽射しと、おだやかだが一定して吹いている風なら、洗濯物はすぐに乾くだろう。脱水機から出したとき、すでになかば以上は乾いていると言っていい状態なのだから。

バルコニーから居間に入った恵美子は、居間を横切って廊下に入り、ユーティリティ・ルームまで歩いた。なかに入り、ハンガーをひとつ、壁のフックからはずした。ビニールのチューブをかぶせた針金でできている、簡単なつくりのハンガーだ。

バルコニーへひきかえした恵美子は、サボをはいて人工芝のうえに出た。風が吹いた。彼女の髪があおられ、シャツのえりや裾がはためき、スカートの裾が高く舞いあがった。すんなりとかたちよくのびた、量感のある白い両脚が、太腿のかなり高い部分まで、あらわになった。

上体をかがめた彼女は、かごのなかにひとつだけ残っている洗濯物を、とりあげた。両手で持ち、おだやかな手つきで、その洗濯物を広げた。

長袖のシャツだった。一〇〇パーセント・コットンの、クラシックなドレス・シャツのスタイリングによる、タッタソル・チェックのシャツだ。白地のうえに赤と黒でこまかなチェックがつくってあった。まだ水気を含んで湿っているいまでも、手ざわりは快適だ。

広げたそのシャツを、恵美子は、いまユーティリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ティ・ルームから持って来たハンガーに、ていねいにかけた。ハンガーのうえでシャツの形をととのえ、うえからふたつめとみっつめのボタンを、かけた。

左胸にひとつだけポケットのあるその長袖のシャツは、ボタン・ダウンだった。そして、右のえりの先端をボディにとめているボタンを中心に、大きくひとつ、かぎ裂きが出来ていた。

ハンガーを、恵美子は、物干し竿にかけた。シャツの、ことのほか長くつくってあるテイルが、風になびいた。

風にゆれているそのシャツの、喉もとを、恵美子は見あげた。

このタッタソル・チェックのシャツは、平野健二が着ていたものだ。はじめて彼がこのシャツを着ているのを見たとき、すでに右えりのボタンのつけ根ちかくが、小さくかぎ裂きとなっていた。右えりの先端は、そのかぎ裂きのため、いつも浮きあがって見えた。

その日、平野が彼女の部屋に泊まり、彼が脱いだこのシャツを恵美子は素肌に着てみた。ゆったりと大きく自分をつつんでくれるサイズと、一〇〇パーセント・コットンの着心地の良さが気に入り、平野からもらいうけた。そして、そのとき以来、彼女はこのシャツをパジャマのかわりに使っている。

はじめのうち、右えりの先端のかぎ裂きは、ごく小さかった。裂け目が広がらないように手当てをすることはできるが、そうしないほうがいいと思った恵美子は、かぎ裂きをそのままにしておいた。洗濯のたびにすこしずつ大きくなり、いまでは、指をそろえてすぼめれば片手がとおってしまいそうなほどの大きさにまで、広がっている。

左手をのばし、恵美子はそのかぎ裂きに指さきを触れた。

バルコニーの手すりまで歩いていき、恵美子はこ

の四階の高さから見渡すことのできる丘の下の光景を、ながめた。青く晴れた空の下に横たわっているその光景は、強い陽射しによって、こまかなところまでくっきりと見えた。濃い影が、ディテールのひとつひとつを、鮮明に縁どりしている。

風に吹かれてしばらくながめていた恵美子は、やがて、手すりの前を離れた。洗濯物を干したところまでひきかえし、かごを片手に持ち、居間に入った。

ユーティリティ・ルームへいってかごを置き、洗濯のあとかたづけをすると、彼女は廊下に出て来た。居間に入り、アーチをくぐってキチンに入った。

ケトルに水をすこしだけ注ぎ、クッキング・レンジの電熱コイルのうえにそのケトルを乗せた。

紅茶のカップと受け皿を出して来てテーブルに置き、カバッドからハーブ・ティーの紙箱をとり出した。

淡い微妙な色調のグリーンの地に、黄色と濃いアクアマリン・ブルーの洒落た色づかいで、模様やフランス語の商品名が、その横長の箱に印刷してある。

箱のふたを開き、恵美子は、なかにまだいくつも入っている小さな紙袋をひとつ、つまみ出した。紙袋にも、箱とおなじ色づかいで、模様と文字が印刷してある。気のきいた美しさを彼女は気に入っている。このハーブ・ティーを飲むたびに、紙袋を指ときで楽しみ、色づかいをつくづくと見てしまう。

彼女の指ときが、紙袋を開いた。多年草クマツヅラとミントの葉をこまかく砕いたものが入っているティー・バッグを、紙袋のなかからひっぱり出した。バッグについている白い糸の先端に、紙袋の一部分が、つまみのように小さく四角に残るようになっている。

ティー・バッグを、彼女は、紅茶のカップに入れた。湯は、すぐにわいた。ケトルを電熱コイルからおろし、カップのなかに湯を注いだ。クマツヅラと

ミントによる一杯のハーブ・ティーが、やがて出来た。

ティー・バッグをとってすてた彼女は、カップを乗せた受け皿を持ち、キチンを出た。居間として使っているスペースの、張り出し窓のあるところまで歩いた。

窓の前には、小さな丸いテーブルと、椅子があった。受け皿に乗せたカップをテーブルに置き、彼女は椅子にすわった。そして、バルコニーのほうに目を向けた。強い陽射しが、バルコニーいっぱいに当たっていた。風に、洗濯物が、はためいていた。ハンガーに吊るした平野健二のタッタソル・チェックのシャツも、裾が右に左にと、ゆれ動いていた。

恵美子は、受け皿を持ちあげた。脚を組みあわせ、スカートの裾から大きく出ているひざに受け皿を乗せ、左手で支え、右手でカップを持ちあげた。カップを唇へはこび、ミントの香りをかぎつつ、熱いハーブ・ティーを飲んだ。

すわり心地のよいその椅子の背もたれに体をあずけ、脚を組み、恵美子は、ハーブ・ティーに神経を集中させた。三分の一ほど飲んでから、受け皿をテーブルにもどし、その上にカップを置いた。

丸いテーブルのうえにかさねて置いてあった七枚の絵葉書を、彼女は左手でとった。三月二七日、雨の木曜日の午後、あてのない旅に出る平野健二を恵美子が見送って、ふた月ちかくなる。その二か月のあいだに、旅さきの平野から仙台の恵美子のところに届いたのが、この七枚の絵葉書だ。最初の一枚、気仙沼大島の絵葉書は、平野が出発した二日後に届いた。平野らしい、軽快に洒落たやり方だと思い、恵美子はうれしかった。

届いた順番にかさねてある七枚の絵葉書を、恵美子は、最初の一枚から順番に見ていった。

二枚目の、四国から届いた絵葉書の文面が、恵美

子はもっとも気に入っている。ブルーのボールポイントで書いた、ていねいな字の、みじかい文面を、恵美子は読んだ。

「三枝恵美子様

出発したあくる日に出した絵葉書は、届きましたか。これが、二枚目です。四国の、国道33号線の郵便ポストのうえで書いています。正午です。いい天気です。絵葉書のうえに、ぼくの手の影と、ボールペンのみじかい影とが、できています。

平野健二」

七枚ある絵葉書の、どの文面も、みじかかった。七枚とも、その絵葉書の文面を書いているときの平野の様子が、鮮かに目にうかんでくるような文面だ。どれにも、日付がそえてある。そして、三枝恵美子様と、フル・ネームでていねいに、呼びかけの言葉が書いてある。自分の名前も、省略せずに、平野健二と、フル・ネームだ。

絵葉書が届く間隔は、だいたい一定している。このひとり旅をすくなくとも二年はつづけると平野は言っていたから、ふた月足らずで七枚の絵葉書というペースがつづくと、二年間ではかなりの枚数となる。ふとそう思ったとき、恵美子は、平野からの絵葉書を置いておくためだけのテーブルを持とうと思い、いま彼女のかたわらにある小さな丸いテーブルを買った。

カップを右手にとり、恵美子はハーブ・ティーのつづきを飲んだ。そして、三枚目、四枚目と、絵葉書を見ていった。

自分がどこで絵葉書を書いているのかということを、平野はかならず文面のなかに明記している。投函した場所は、消印を見ればわかる。しかし、一時的なものにせよ滞在さきや宿泊さきが書いてあるものは、一枚もない。したがって、たとえば恵美子のほうから彼に連絡をとることは、できない。次の絵

葉書が届いてはじめて、いま彼はここにいるのかと、知ることができるだけだ。

ハーブ・ティーを飲みおえたカップを彼女はテーブルの上の受け皿に置き、両足をフロアに降ろしてひざをそろえ、太腿のうえに七枚の絵葉書を、写真のほうをおもてにして、ならべた。

七枚の絵葉書の写真に共通しているのは、構図のなかに占める青空の面積が七枚ともみな広い、ということだった。

太腿やひざのうえに七枚の絵葉書を乗せたまま、恵美子は、再びバルコニーのほうに目を向けた。夏のような空が青く晴れていて、強い陽射しが明るく照っていた。

まもなく、正午になる。

いま、陽の照るなかで絵葉書の文面を書いたなら、二枚目の絵葉書の文面に平野が書いているとおり、ボールペンやそれを持っている自分の手の影が、濃くみじかく、絵葉書のうえにうつるだろうかと、恵美子は思った。平野は、自分あての絵葉書を書くときはいつも、天気のいい日の明るく強い陽射しのなかで書いているのだろうかと、かさねて恵美子は思った。

さっき干したばかりの洗濯物へ、恵美子の視線は移動した。ひとつひとつストーリーを持っている洗濯物のどれもが、五月の風にはためいていた。

ハンガーにかけて干してある、恵美子のパジャマがわりの、平野のシャツも、裾や両袖が風になびいていた。

28

応仁二年、戦乱が連続している京都をひき払ったかつての関白、一条教房は、四国へ都落ちし、土佐の中村に住みついた。一条教房は、やがて国主に推

され、国主となった。だから、それまでは小さな盆地のなかの農村集落でしかなかった土佐中村は、土佐国の国府となった。一条教房の好みによって町は京都に似せてつくられた。道は京都とおなじように碁盤の目に走り、東山、大文字山、祇園、鴨川など、京都とおなじ地名がいくつもつけられた。土佐の京都、あるいは、小京都、と呼ばれるようになった由来は、ごく簡単に言うと以上のようだ。出かけて来るにあたって、彼女がガイド・ブックを読んで知ったことだ。

応仁の二年というと、西暦になおすと一四六八年だ。いま二〇歳の彼女からみると、あるいはいま何歳の人であろうとも、一五世紀はずいぶん昔だ。そのころの日本史のディテールにつうじていない彼女は、一条という人がここに京都の縮小版をつくった、としかいまのところは理解できない。そして、現在の彼女にとっては、それで充分だった。

これまでに、彼女は、昔の雰囲気がほんのすこしは残っている城下町を、いくつか見て来た。城下町の雰囲気が、彼女は好きだ。土佐中村には、いまはじめて来る。彼女はここも気に入った。

五月の日曜日、午後まだ早い時間の、強くて明るい陽射しのなかに、いま彼女はひとりで立っている。テニス・シューズに一〇オンスの軽いブルージーンズをはき、ポロシャツを着ている彼女に、今日の陽射しはまるで真夏のようだ。

彼女がひとりで立っている道は、美しく晴れた青い空から透明な陽光が降ってくるほかは、人のひとりもいない、静かなところだ。心地よくせまい道がまっすぐに前方へのびていて、三〇メートルほど前方でおなじような道と直角に交差している。黒い瓦を乗せた白い土塀が道の両側につづき、塀の内側はどちらも重厚な雰囲気をたたえた大きな屋敷だ。

目の前にあるこの光景を、なんの予備知識なしに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb